飛騨農林事務所の普及活動状況（飛騨版）

平成 31 年 1 月 31 日現在

今月の重点活動

■青年農業士　青年農業士連絡協議会飛騨支部が夜間勉強会を開催

【勉強会の様子】

１月29日（火）に青年農業士連絡協議会飛騨支部では、会員の技術力向上を目的に夜間勉強会を開催した。

今回の勉強会では「飛騨地域の地力（可給態窒素）を加味した適正施肥にむけて」というテーマで農業技術センターから講師を招いて開催し、４Ｈクラブ員・新規就農者・長期研修生などにも参加を呼び掛け、22名の参加があった。

出席者は、自分の経営に勉強会の内容を生かすために、熱心に質問を行っていた。

農業普及課では今後も青年農業士連絡協議会飛騨支部の活動が自主的に行われるよう継続して支援していく。

新たなブランドづくり

■自給飼料　自給飼料生産の高度化

【自給飼料生産の検討会】

１月 10 日（木）に飛騨酪農農業協同組合にて、酪農家及び種苗メーカーと自給飼料生産に係る検討会を開催した。自給飼料利用拡大と農地利用の効率化により、自給飼料生産の高度化を図ることが目的である。

酪農家から、夏季のトウモロコシやソルガム栽培、秋季の赤かぶ栽培後に牧草栽培を導入し、三毛作体系の確立が要望されている。そこで、品種及び播種時期について検討し、飛騨地域では５月 15 日にソルガム、トウモロコシを播種し８月 15 日までに収穫、８月 20 日に赤かぶを播種し 10 月上旬に収穫、10 月 25 日までにイタリアンライグラスとライムギを混播し５月上旬に収穫する体系を設定した。しかし、過密な計画で収穫が遅れると次作に影響するため、リスクが非常に高いことを助言した。

農業経営課高山駐在の農業革新支援専門員は自給飼料の栽培・調製方法の指導を行い、自給飼料生産の高度化を支援していく。

多様な担い手づくり

■担い手　新規就農者フォローアップ研修会（高山市）を開催

【１年を振り返る新規就農者】

高山市就農支援協議会では、１月15日（火）に新規就農者フォローアップ研修会を開催した。研修会には、本年度に夏秋トマトやほうれんそう、メロン栽培で就農した６人が出席し、生産者、県、市、ＪＡ等の関係者と意見交換した。

同協議会の高山市農業委員会長からは「高山市では以前から地域の後継者や新規参入者を、地域みんなで育てている素晴らしい地域である。昨年は災害が多かったが、くじけずに頑張ってほしい。」と激励された。新規就農者からは「災害の打撃が大きかったが、周囲の支えが大変ありがたかった。」等、厳しい１年を振り返った。

同協議会はこの日、担い手育成推進や県内14拠点との連携、ノウハウの共有を図るため県の15番目の就農研修拠点にも認定された。

農業普及課では、関係機関と連携して就農希望者の面談～研修、就農後の経営安定まで、今後も継続して支援していく。

■飛騨トマト研修所　３期生就農間近、菌床シイタケとの複合経営（飛騨市神岡町）視察

【規格の説明をうける研修生】

ＪＡひだ飛騨トマト研修所では、夏秋トマトの栽培がない冬期に３名の研修生と参加を希望する新規就農予定者数名を対象として、冬期研修（農業技術講座、全９回）を開催している。

その一環として１月 24 日（木）に、飛騨市内の指導農業士（夏秋トマトと菌床シイタケの複合経営）の視察研修を実施した。

菌床シイタケは飛騨地域における冬期の代表的な産品であり、就農後の栽培規模拡大に向けた年間雇用体制を確立するための有力な導入品目に位置づけられる。指導農業士からは、基本的な栽培方法や必要な資機材等に関する情報、夏秋トマト栽培との労力競合の解消方法などが提供され、研修生は熱心に耳を傾けていた。

農業普及課は、視察研修の企画や指導農業士との調整を行い、研修生の円滑な情報収集を支援した。

■飛騨高山高校　和牛甲子園２連覇の報告

【和牛甲子園２連覇についての発表】

１月 21、22 日にひだホテルプラザにて第 10 回和牛改良研究会が開催され、和牛改良組合、農業大学校及び農業高校が参加した。そこで、飛騨高山高校は和牛甲子園２連覇について発表した。

和牛甲子園では、「肉質」と「日頃の取り組み」が評価される。飛騨高山高校が出品した肉牛の肉質は優れており、取組み発表は、雌牛肥育技術の向上と畜産ＧＡＰ認証取得の取り組みであり、全国で初めて高校で畜産ＧＡＰチャレンジシステムを取得した取り組みが高く評価され、昨年に続き総合部門の最優秀賞を獲得した。

飛騨高山高校は来年度にＪＧＡＰ認証取得を目指しており、農業経営課高山駐在の農業革新支援専門員がＪＧＡＰ指導員としてＪＧＡＰ認証取得を支援する。

売れるブランドづくり

■酒米　「ひだほまれ」の高品質、安定生産を目指して

吉城酒米生産組合では酒米品種「ひだほまれ」を生産しており、１月 23 日（水）にＪＡひだ古川支店にて 30 年産の結果及び次年度に向けて栽培反省会が行われた。

農業普及課からは、全量基肥施肥実証ほの調査結果について報告、次年度の計画等について説明した。その他、「ひだほまれ」取扱酒造店、搗精業者等から、各方面からの状況報告、意見等を頂き、活発な意見交換が行われた。

今後は全量基肥施肥の品質面を中心とした調査を継続、次年度に向けた各種支援を行っていく。

【栽培反省会風景】

■果樹　“飛騨の果樹防除暦”説明会を開催

1 月 23 日(水)に､JA ひだ高山営農センターにて平成 31(2019)年版の防除暦についての説明会を開催した。この防除暦は、飛騨農業振興会と県関係機関が共同で毎年作成しているもので、農業普及課もその編集に当たって支援を行った。

当日の高山市果実組合主催の説明会では､組合員 25 名が出席し、発行に当たっての変更点や、収穫後の気象条件を加味した春以降の防除の注意点について説明を行った。生産者からは、昨年夏に発生した新型黒星病についての質問があり、農業普及課から現状と対策について情報提供を行った。

【説明会の様子】

今後、管内の他組合でも説明会が予定されているため、農業普及課では次年度の高品質な果樹生産に向けて支援していく。

■ＧＡＰ　ＧＬＯＢＡＬＧ．Ａ．Ｐ認証維持にむけて

夏秋トマト、しいたけ生産販売、農産加工生産販売を営む(有)橋場農園では今後の販売情勢への対応のみならず､自社の経営管理、労務管理に役立てようとＧＬＯＢＡＬＧ．Ａ．Ｐ認証を取得している。

今回、認証取得後初めての維持審査を受審した。審査ではこの１年間の取り組み内容が検証・評価され、審査員からは高評価を得た。これまで農業普及課では各種書類整備、ほ場等環境整備の助言や衛生管理、労務管理、農薬使用等の研修講師などの支援を行ってきた。今後もさらに管内生産者のＧＡＰへの理解が深まり、取組が拡がるように支援を継続していく。

【ＧＬＯＢＡＬＧ．Ａ．Ｐ維持審査の様子】

■夏秋トマト　**高山トマト部会栽培研究班の反省会実施**

高山蔬菜出荷組合トマト部会の班活動の一つである、栽培研究班の反省会と次年度計画の検討会を１月 22 日（火）に行った。

育苗培土や台木試験など評価の高かった内容については部会員の次年度計画に盛り込んでいく。また、新年度の試験内容について意見を出し合い、さらなる経営向上に向けて課題を検討した。生産者からは「購入した資材を既存品と比較していきたい」など積極的な話し合いとなった。

今後、課題決定後に取り組み内容を生産体系に組み込み、調査を行っていく。

【反省会の様子】

■ほうれんそう　**全体勉強会における農福連携取り組みの報告**

１月 31 日(木)、ＪＡひだ本店にて飛騨ほうれんそう部会の全体勉強会が開催された。労働力不足が産地の課題となっていることを踏まえ､農業普及課から農福連携の取組み報告を行った。農福連携の基本的な考え方（農業側・福祉側ともに Win－Win の関係になること）や障がい者の受け入れポイントの説明及び農業普及課も関わって作成された農福連携マニュアル（ほうれんそう調整作業の工程も掲載）の紹介など行った。

現状では障がい者を雇用しているほうれんそう農家はまだ少数だが、今後産地に雇用確保の一手段として農福連携に関心を持ってもらえるよう、農業普及課として取り組みを継続していく。

【普及課からの報告】

■宿儺かぼちゃ　**冬期栽培研修会を開催！**

宿儺かぼちゃ研究会は、飛騨及び下呂地域の宿儺かぼちゃ栽培者約 200 名で組織されている。研究会主催による冬期栽培研修会が１月 16 日（水）に高山市丹生川支所で開催された。

本年度は記録的な大雨や高温に見舞われたことから、昨年度と比較し約３割の出荷量減少となった。農業普及課からは、大雨・高温対策として、排水対策、病害防除、日焼け果防止等について情報提供を行った。

農業普及課では、次年度も栽培管理指導等で宿儺かぼちゃ研究会の活動支援を行っていく。

【あいさつする若林会長】

住みよい農村づくり

■飛騨名農会　冬季セミナーで飛騨市長講演「元気が出る地域づくり　飛騨市の実践」

【ＰＲに苦情はない！】

１月 22 日（火）に飛騨市古川町八ツ三館において飛騨名農会会員および関係者 24 名が参加して恒例の冬季セミナーが開かれた。今年は「地域おこしこそ名農会の役割」と意気込む若林会長に賛同した飛騨市長が講演した。講演では「良い雰囲気良い方向は、前向きな気持の人数分のべき数で決まる」から始まり、最先端のネット利用（楽天との「飛騨市カード」提携・映画の聖地巡礼サポート）、障がい者サポート施設設置、地域の伝統・誇りの発掘等、飛騨市を元気にする理論と実践が続々と紹介された。ＰＲされる側に立った大胆な活動コンセプトも含め、最後まで新しい提案・実践と別角度からの見地に会員の意識改革につながった。